

浮(ふ) 愉快的な宇宙 –「小林一夫と浮ゆかいな仲間たち」元麻布ギャラリー佐久平–

上田 暁子 (画家)

小林一夫先生は彫刻家だ。私が高校生の時に所属した美術班では顧問の先生だった。放課後の美術室において、先生はあまり教えない先生で、私はあまり描かない生徒でじゃあ一体何をしていたかと言われると困る。美術班の自由を謳歌していたとしか言いようがない。文化祭前に臨時の合唱練習場として使われるために美術室にピアノが運び込まれるとやたらとそれを囲んで弾ける人は弾いて歌う人は歌う。向かいの音楽室から吹奏楽のパート練習の子達が立ち寄る。絵は描かないけれど美術室にくるのが好きな友達がモデルをしながら漫画を読んでる。他の部と掛け持ちをしながら好きな絵を描きに来る人がいる。時々しか現れないけれどその度に超高速で衝撃的な絵を仕上げてく天才肌、毎日黙々とまさに修行のようにならずと精密なデッサンを描き続けるハイパー技巧派。ターンテーブルを持ち込んで DJ のようなことを始める一群。そんな空間に突然隣の準備室から鳴り響く太鼓の音色。さすがにみんなの手を止めて駆けつけると、先生が猛烈な勢いでエスニックな趣の皮張りの太鼓を叩き鳴らしていた。驚くみんなを先生は嬉しそうに見回した後、「今完成したばかりのアフリカの太鼓だ」と言いニヤリと笑った。あれこそ私が今回この文章で語りたと思っている「先生の宇宙」に触れた最初だったのではないだろうか。

高校を卒業してからも、先生との交流は途絶えなかった。1、2年間のブランクがあっても、何か展示できる機会があったら先生にはたとえ観てもらえなくとも知らせたい。そういう気持ちから大抵お知らせを送った。それは制作と発表を続けていることのある種のご褒美でもあると思う。美術はそんな風に人と人との間に流れ、しかるべき時間をかけて宇宙を形成する。

今回の展示で、私はそれまで私の知らなかった先生の宇宙の星々(方々)を新しく知ることとなった。浮愉快的な宇宙は広く先生のゆるやかな引力は心地よい。先生が学校の先生だった時代の教え子だけでなくいろんな人がいる。教え子の美大時代の作家仲間、団体展で出会った若者、活動を通して知り合った作家さんなどなど。それぞれの別々に熱々の情熱を持った彼らとの出会いの度に先生は「俺様が太陽だ、俺の惑星になれ！」とかそういう感じでは全くなく「おっ、お前も美術がそんなに好きなのか！ここにいい感じの隙間があるぞ！」と宇宙を広くしてくれ続けているのかもしれない。そしてそれぞれの星から見える宇宙の景色はきっとかなり違っていて私が見たことも想像もしたこともない先生の一面を他の作家さんは知っているに違いない。

だからなのか、展示に際して直接的、間接的教え子の作品が集まっても、作品の醸すムードやカラーは良い意味でんでバラバラだった。だけれど、この先生を囲む展示へのそれぞれの作品にこもった敬意と意気込みが満ちることにより展示空間にはよき張りが生まれていた。

「小林一夫とふゆかいな仲間たち」というフレーズは某TV番組ム〇ゴロウ王国からの引用で、だいぶ前の飲み会で面白半分に冗談として生まれた言葉だ。それが数年後この展覧会の構想段階であった2016年11月頃に、展示のタイトルとして採用されることがかなりスムーズに決定した。その時はこの展示の企画の立役者である画家の小林冴子さんと先生と私とで、その日既に2軒目に当たる小諸のとある飲み屋さんで飲んでいて。カウンター席で冴子さん越しに先生がしばらく静かに考えにふけているのが見えた。それから先生はふと、「不」愉快的のふの字は浮かぶのほうの「浮」にしよう、と呟いた。その時は先生が「不」の字を使うことで発生するネガティブなニュアンスへのためらいを感じてらっしゃると同時に参加作家さんへの配慮をされたのだなと思ひ、そしてその代替案として元のものよりずっとしっくりくるアイディアを白ワイン片手にももの数分で思いつく先生の機微のありように感銘を受けるまでにしか至らなかった。しかしそこから数ヶ月後、実現した「小林一夫と浮(ふ)ゆかいな仲間たち」展オープニングにおいて私は、今展示のために先生が制作した新作を見てふと不愉快の「ふ」を「浮」という字にしたあの夜の事を急に思い出した。

私にとって、先生の作品の第一印象は重厚感、質実剛健な黒光りする御影石の石彫だ。例えば数年前、軽井沢の沢屋での先生の展示を見に行った時。店舗とカフェスペースに隣接する林に、根を下ろそうとしているかのような重力に満ちた先生の作品があった。それは、もう数千年も芽吹きの時を待たずにくまっている巨大な種を思わせた。でもその後先生の作品はその重厚感のみにとどまらず、いろんな場所と調和していく試みの中で自由自在に変化していった。変わっていく自由が素敵だ、ということ先生はいつも教えてくれる。

そして今回の出品作。もう石とは思えないほどの軽やかな基底部のフォルムは下から吹く風を受け止める布のようで、その上に芽吹いたように在る立像は羽持つ者に見える。観た人から「(帽子のように頭に)かぶりたい。」というコメントがあったとこのことを聞いて私自身も強く同意して頷き、さらにドラえもんタケコプターのようにかぶった後には飛んでいけるに違いないと想像をたくましくしてしまうくらいだった。

オープニングパーティーは16時スタートと早めのセッティングだったにもかかわらずそれを更にフライングして先生ご持参のスパークリングワインでみんなで乾杯した。大きな窓からの自然光溢れる明るい元麻布ギャラリー佐久平でパーティーは始まった。その後宴は進み日も沈みだんだん会場が暗くなると先生の作品が光りだした。正確にいうと本当はそれらの作品はずっと光っていたのだった。極限まで薄く削られた大理石が内側に仕込まれた光をやわらかに透かして見せている。会場を暗くして見てみたいという声が多数出てきて「それは見てみたいな」と先生も同意、ギャラリーにお願いをして照明を落としてもらった。パッと全ての照明が落ちるとその3点の作品がどんなにやさしい光を放っているかがよく分かった。ギャラリーの大谷さんが「これじゃ周りの作品が見えないね」とほんの少しだけ照明を戻すと、薄暗いながらも浮(ふ)愉快的仲間達である私達の作品も再び会場にその存在を浮かび上がらせた。それはずっと前から始まっていた先生の宇宙が可視化された瞬間だったように思う。

◆参考展示「小林一夫と浮(ふ)ゆかいな仲間たち」展 2017/5/20～6/2 元麻布ギャラリー佐久平

◆参考作品 同展 小林一夫出品作 「羽化」「大地の母」「世界の中心に立つウサギ」